



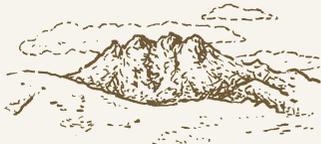
岳参り(宮之浦岳頂上)



牛床詣所

# 山岳信仰と精神文化

Spiritual Heritage Rooted in Yakushima's Sacred Mountains



## 屋久島の山岳信仰「岳参り」

屋久島は島の約9割を山地が占め、人々は海岸沿いの平地に点在する集落で暮らしてきました。かつて集落間は険しい山や川に隔てられ、道路や橋が整備される以前は互いの交流も限られていました。そのため、それぞれの集落が独自の歴史や文化を育んでおり、今も多彩な祭りや伝統行事が受け継がれています。

そうした文化のひとつに、島の山岳信仰を象徴する「岳参り(たけまいり)」があります。岳参りは、集落ごとに定められた山へ登り、山の神に感謝を捧げる伝統行事で、島内各地で今なお続けられています。その起源はおおよそ500年前とされ、集落ごとにルートや儀式が異なるのも特徴です。

たとえば宮之浦集落では春と秋の年2回、益教神社での祈願を経て、海辺の砂を竹筒に入れ、それを山の祠へ納めるという儀式が行われています。この「海の砂を山へ返す」行為には、海と山がつながるといえるでしょう。島人の自然観が表れているといえるでしょう。

かつては信仰と修行を兼ねた数日間の巡礼として、前岳からさらに奥岳(宮之浦岳、永田岳など)まで登ることもあったようですが、現在では日帰りで実施されることがほとんどです。それでも険しい山道を登る行程には敬意が払われており、集落の人々は若者たちの参加を促しながら、代々その信仰と営みを守り継いでいます。また岳参りは、屋久島の自然と共に生きる知恵と祈りの文化を今に伝えるだけでなく、屋久島に暮らす人々の精神文化の根幹を成す重要な要素の一つになっています。

## 集落それぞれの信仰を 今に伝える神社

屋久島には、各集落にそれぞれの暮らしや文化に根ざした神社があり、山や海、そして人々の営みに寄り添うように祀られてきた神々は、屋久島独自の精神文化を今に残す存在です。神社はまた、集落の歴史や文化、そして人と人とのつながりを育む場でもあります。たとえば、十五夜の綱引きや多くの民俗芸能は、神に祈りを捧げると同時に、地域の絆を深め、世代を超えて受け継がれる大切な行事となっています。

屋久島全体を見守る総社的存在として、また島で最も古くからあるとされるのが益教(やく)神社です。「山幸彦」で知られる彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと)をはじめとする山・海の神々7柱が祀られています。屋久島には益教神社から分霊した神社も多く、明治維新までは集落名を冠した益教神社が18社ありましたが、今は宮之浦の本社と原集落のみとなっています。18社の一つで

あった八幡嶽神社は漁業が盛んな一湊集落にあり、地域の人びとの願いが反映されたのか、「漁業と縁結びの神様」として知られています。各集落にある神社は、そこで暮らす人々の祈りや思いを受け止めながら、地域の精神的な支えとして今も大切に受け継がれています。

また、山岳信仰と深く結びついた聖地として大切にされてきたのが「詣所(もいしょ)」です。これは山と里の境界に設けられた場所で、女人禁制のため岳参りに参加できない女性や子どもたちが、山の神を遥かに拜んだ、いわば里における信仰の場でした。特に宮之浦集落の牛床詣所は、屋久島の山岳信仰を象徴する場で、苔むした石段や祠は静かな神聖さをたたえています。

これらの神社や祈りの場は、それぞれの集落が自然とともに歩んできた歴史と暮らしの記憶を伝える存在です。屋久島の旅で神社を訪れることは、単に観光地をめぐるのではなく、地域に息づく精神文化にふれる体験ともいえます。



## 森に抱かれた、神聖な場所 牛床詣所 [MAP P130]

白谷雲水峽へ向かう道から脇道に入った先、静かな森の中に佇む牛床詣所。苔むした二体の仁王像は屋久島町の史跡に指定されています。

[所在地] 屋久島町宮之浦  
(牛床公園バス停から徒歩約10分)

# 多様な伝統芸能と地域文化

Traditional Performing Arts and Local Culture of Yakushima

## 屋久島の心を映す伝統芸能

屋久島の各集落には、それぞれ特色ある踊りや祭りが伝承されています。

県の無形民俗文化財に指定されている安房集落の「如竹踊り」は、「屋久聖人」とも称される安房出身の儒学者・泊如竹(とまりじょちく)が島民に教えた踊りと伝えられ、武士の姿をした男性によって踊られます。如竹の功績を称え、五穀豊穡や無病息災を祈る象徴として大切に受け継がれています。

また屋久島の「盆踊り」は、集落ごとに曲や歌詞、踊り方、さらには踊る場所まで違うのが特徴です。楠川集落の「楠川盆踊り」は7つの踊りで構成されており、低い姿勢で、同じ側の足と手をそろえて踊ります。麦生集落では鹿児島島地方で広く見られる棒踊りの一つ「なぎなた踊り」を盆踊りとして伝承しています。

永田集落で行われていた「トビウオ招き」は豊漁を祈願する儀式で、トビウオを呼び寄せるため、女性の演者が歌いながら、菅笠や色のついた吹き流しで飾られた笹竹を振り、祈りました。この儀式に似たものは奄美大島や台湾付近の島々でも見られ、女性が霊力を持つとされる琉球文化に通じる祭祀と言われています。現在、永田集落でのトビウオ漁は途絶え、行事としては行われていませんが、地元の保存会の

方たちにより催事などで披露しています。

そして屋久島の祭りで欠かせないのが「綱引き」です。綱引き行事は広く世界で行われていますが、アジアでは南九州や沖縄が最も盛んと言われており、屋久島でもほぼ全ての集落で継承されています。またほとんどが旧暦8月の「中秋」に行われ、「十五夜綱引き」として知られています。屋久島では中間集落や栗生集落の綱引きが有名で、集落の五穀豊穡や家内安全を祈願して行われます。

この他にも原集落の「ごちよう踊り」や湯泊集落の「笠踊り」など、様々な芸能が伝承されており、それぞれの地域の人々の暮らしや歴史、自然とのつながりを映し出しています。またこれらの芸能には、かつて薩摩や琉球といった周辺地域との交流の中で育まれた文化的影響も垣間見ることができ、それらが重なり合いながら、今の屋久島らしい多様な地域文化として息づいています。

一方で、人口減少や高齢化により、こうした伝統芸能の継承は大きな課題を抱えています。近年では、地域の保存会や学校、行政が協力して次世代への継承活動を活性化させています。伝統芸能のワークショップや地域祭りへの参加促進など、多様な取り組みを通じて、屋久島の豊かな文化遺産を未来に繋げる努力が続けられています。



トビウオ招き



十五夜綱引き



ごちよう踊り



## 地域文化に深く根付いた

### 「えびす信仰」

屋久島で敬われるえびす様は、海上の無事や豊かな漁、商いの繁りを願う祈りの中心で、島では「えべすさま」「よべすさま」とも呼ばれます。港の近くで豊漁を授ける神を祀る「浜えびす」、集落の中で作物の実りを願う「村えびす」「町えびす」があり、浜えびすは海を望む場所に据えられ、造りや色、顔つきも土地ごとに異なります。江戸期にカツオ漁とともに伝わった信仰が根づき、自然への感謝と畏れを込めた祈りとして継承されてきました。

江戸後期にトビウオ漁が盛んになると、祈願の対象も広がり、魚を抱くえびす像はカツオ漁、海から拾った自然石を祀るかたちはトビウオ漁の守り神として拝まれるようになります。各集落では「えびす祭り」や「トビウオ祭り」が行われ、豊漁や航海安全、商売の繁栄を願いました。永田集落の「トビウオ招き」は、このえびす祭りに続く儀式で、祈りと芸能が結びついた象徴的な催しでした。

## 文化体験の入口としての 拠点や取り組み

こうした多様な文化を実際に体験し、理解を深める場として、「屋久島環境文化村センター」や「里めぐり」ツアーが注目されています。環境文化村センターでは、映像や展示を通じて屋久島の自然と文化の関係を学ぶことができ、初めて訪れる人にとって格好の導入となります。また、語り部(地元案内人)と歩く「里めぐり」では、各集落の暮らしや伝統行事に触れることができ、観光だけでは出会えない島の文化の本質に触れる貴重な体験が得られます。

### 「里めぐり」ツアーのお問い合わせ

屋久島里めぐり推進協議会

[電話] 0997-42-2900

(屋久島環境文化村センター内)



## 屋久島と西郷隆盛

明治維新の英雄・西郷隆盛は、実は屋久島にも足跡を残しています。1862年、奄美大島からの帰路にあった西郷は、まず屋久島の一湊へ立ち寄りました。ここで風待ちのため数日間滞在し、港近くに今も「西郷隆盛上陸の地」の碑が残されています。当時の様子は同行していた村田新八が記した『宇留満乃日記』に残され、旅の記録として伝わっています。さらにその後、西郷は口永良部島にも立ち寄り、島の人々に財布やふんどしなどを贈って感謝の気持ちを表したと伝わります。島には西郷さんが好んで座った石や湯あみをした温泉などのエピソードも残り、地元の人々に今も語り継がれています。自然豊かな屋久島と、その隣に浮かぶ火山島・口永良部島。西郷が過ごしたひとときに思いをはせながら歩くと、旅の風景に歴史の彩りが加わります。



### 西郷隆盛上陸の地 石碑

[MAP P19⑩]

[所在地]

屋久島町一湊(東側入り口三叉路)

# 海と山の恵みが織りなす食文化

Discover the Authentic Flavors of the Island

豊かな森と清らかな水、黒潮流れる海に囲まれた屋久島。ここでは自然とともに生きてきた人々の知恵が、独自の食文化となって今に受け継がれています。海と山の恵みに支えられた食卓は、素朴で滋味深く、どこか懐かしさを感じさせてくれます。訪れた人にとっては、新鮮な驚きと出会いの連続でもあります。



## “超軟水”で仕込む 屋久島焼酎

屋久島の豊かな海の幸と相性抜群なのが、屋久島のおいしい水で造られた焼酎です。年間を通して雨が多く、湿潤な気候に恵まれた屋久島では、その雨水が花崗岩層を長い時間かけてろ過され、「超軟水」として湧き出します。ミネラル分がほとんど含まれないこの清冽な水は、焼酎の仕込みに理想的で、まろやかで雑味のない味わいを生み出します。

島内で焼酎造りを手がける蔵元のひとつが「三岳（みたけ）」の銘柄で知られる三岳酒造です。「三岳」の名前は、屋久島の山岳信仰に由来しており、島の中央に連座する宮之浦岳・永田岳・黒味岳の3つの山々にちなみ付けられました。屋久島の名水を使ったそのやさしい飲み口は、島内外で高い人気を

誇り、長年にわたって地元の食卓や晚酌の場に親しまれてきました。観光客の間でも「屋久島といえば三岳」といわれるほどの定番銘柄で、島内の飲食店や土産物店で見かけることができます。

さらに島の東部、春牧集落にある本坊酒造の「屋久島伝承蔵」では、屋久島の自然と伝統に根ざした焼酎造りの現場を見学できます。蔵内では、蒸留や仕込みの工程を間近に見学できるほか、限定商品の試飲や購入も可能。島限定の銘柄も多く揃っており、ここでしか出会えない味との一期一会が楽しめます。

焼酎のまろやかな口当たりは、脂ののった首折れサバの刺身や、香ばしく焼き上げたトビウオ、そして素朴な味わいのつけあげなど、素材の持ち味を活かした島料理と絶妙に調和。冷やしてロックで、あるいは水割りやお湯割りで、料理に合わせて楽しむのも魅力のひとつです。屋久島の自然が育んだ一杯、海の恵みとともに、じっくり味わってみてください。

## 名水、名酒を生む 三岳酒造 [MAP P15⑨]

人気の芋焼酎「三岳」の製造元。訪問日前日までの電話申し込みにて工場見学ができます。見学は製造期間にあたる9月から12月がおすすめです。

[所在地] 屋久島町安房2625-19  
[定休日] 不定休(電話受付は平日の7:45~17:15)  
[電話] 0997-46-2026



## 昔ながらの手作り甕壺仕込み 屋久島伝承蔵 [MAP P15⑩]

国産和甕と人の手仕事を守り、良質な酵母と麹が交える昔ながらの焼酎造りが特徴です。

[所在地] 屋久島町安房2384  
[営業時間] 9:00~12:00 / 13:00~16:00 ※最終受付15:30  
[休館日] 12/29~1/3 ※臨時休業有り  
[電話] 0997-46-2511 ※見学は必ず事前にご予約ください。

## 首折れサバに、トビウオ。 海の恵みを味わう



屋久島を代表する地魚といえば、ゴマサバです。中でも名物「首折れサバ」は、ゴマサバを一本釣り後すぐに首を折って血抜きし、鮮度を保つ技法で処理されたもので、明治時代に一湊集落の漁師が考案。刺身でも食べられるほどの鮮度が特徴です。かつては東京の築地市場でも人気でしたが、現在は漁獲減や担い手不足により、ほとんどが島内で消費される貴重な地魚となっています。そしてゴマサバを加工し作られるのが、屋久島を代表する特産品「サバ節」です。香り高くコクのある出汁が取り、このサバ節を使った味噌汁や煮物は、島の家庭料理の定番であり、どこか懐かしい味わいが魅力です。サバ漁が盛んな一湊集落には今も2軒のサバ節工場があり、伝統の技法を今に伝えています。

屋久島の夏を象徴する魚は「トビウオ」です。屋久島では年間を通して漁獲され、特に5~6月が旬。刺身や塩焼き、から揚げの他、干物にしても風味がよく、保存食としても重宝されてきました。すり身を揚げた「つけあげ(さつまあげ)」も人気です。



## 日本一早い春の味わい屋久島茶

森を潤す豊かな雨と清らかな水、そして霧に包まれる山々の気候が、お茶づくりに理想的な環境を生み出しています。屋久島では、全国に先駆けて3月下旬~4月上旬ころには新茶の収穫が始まります。日本で最も早く味わえるこの新茶は、鮮やかな緑色とまろやかな旨味、そして爽やかな香りが特徴です。渋みが少なく飲みやすいため、幅広い世代に親しまれています。特に多く栽培されているのが、旨味が強く高級茶にも用いられる希少品種「さえみどり」。自然に寄り添った栽培によって、そのやわらかい甘みと上品な味わいがいっそう引き立ちます。森の空気に包まれて飲む一杯は、旅のひとつを特別にしてくれる贅沢な味わい。屋久島を訪れたら、島の自然とともに育まれた屋久島茶をぜひお楽しみください。

## 島を彩る柑橘 — ぽんかん・たんかん



島の温暖な気候と傾斜地の多い地形、そして昼夜の寒暖差が、果実に濃厚な甘みと香りを育んできました。屋久島は、日本で初めてぽんかん栽培が成功した地で、大正時代に台湾から苗木が持ち込まれ、以来100年にわたり島の特産として受け継がれてきました。冬の訪れとともに実るぽんかんは、外皮はしっかりしていますがむきやすく、香り高くジュースで、昔から島の人々に親しまれています。屋久島を代表するもうひとつの柑橘が、たんかんです。ぽんかんとネーブルオレンジの自然交配から生まれたとされるこの果実は、甘さと酸味のバランスが絶妙で、たっぷりの果汁と芳醇な香りが特徴。屋久島では2月から3月に収穫の最盛期を迎え、春を告げる味覚として観光客にも人気です。地元ではジュースやジャムなどの加工品にも活用され、旅のお土産としても好評です。



トビウオの刺身



屋久島焼酎



屋久島茶



たんかんの収穫